

67

長富恵淑「天柱居記」試論

誌上発表

—被伝者・長富升庵は独嘯庵に他ならず—

亀田 一邦

二松学舎大学日本漢学研究センター

伊藤房次郎『関の町誌』（1940）に「天柱居記」（225字）を収載する。同記は戦前まで亀屋伊藤家（慶長創業。下関最古の薬舗）に伝来したが、空襲で他の古記録ともども焼失した。撰者の長富恵淑は赤間関の医者とししか説明がない。いま発表者の手で形を整え、校訂して掲げると以下ようになる。

大通街去閭咫尺，其地曰王子，其山曰天柱。曰天柱，即山人所託居也。嘻乎山人光采，煥發於後世也，是天柱山之見也。天柱山名，施於四海也，是山人之見也。山人者，赤間関処士長富升庵也。山人既結束，有桑弧之事。於四方倏察諸侯，異政機變，見重於當世，王化不行。刑政既頽，獨明負累。斗筭之役，無益於濟民，絕志於青雲也。乃退，將負荷詩書之業於當世。赤間関也者辟地也。其人澆薄也。上無拔擢之明，下無好賢之禮。立身揚氏者，非束手之地。然父母方持舐犢之愛，不許周流於異州止。人亦深欲不曷色養。今茲飯隱之計，既已爰乃感矣。山与山人綱繆。而出者亦其自然歟。

おそらく全文ではなく、抄録であろう。内容を検討すると、居住地、隠棲、雄飛の志、諸国漫遊、政道批判と仕官の断念、地域に対する不満、開塾と講学、両親との関係が述べてあり、これらは永富独嘯庵の思考・行動・生活痕と完全な一致をみる。先行する吉村藤舟・木山芳朋・栗島行春らの研究では、糖禍後の独嘯庵は生まれ育った豊浦郡宇部村へと戻り、実家（勝原家）の裏手に草庵を結び、枯淡な禅定生活を送ったとされる。しかし「天柱居記」は、赤間関の王子町にある小岡（天柱山）に仮住まいして、経書を講じながら生活したと述べており、これを『葆光秘録』附載の書簡等をも参照して審究するならば、従来の所説は全くの謬解であったことが判明するのである。

一方で語詞の出典について検証を行うと、大半が「三史（史記・漢書・後漢書）・文選」以下、経史の諸書に基づき、自由な造語を控える傾向が鮮明となる。中国の古典に用いられた字句の模擬・転用により、和句・和臭を免れようとする修鍊の方法は徂徠派の特徴であり、作者・長富恵淑の修學歷の一斑が窺えよう。すなわち恵淑という人は、徂徠派に属する師に就いて、古文辞の学を修めたのである。そうやって身につけた学識・教養を駆使して「天柱居記」は作成されており、経史の字句を丁寧に吟味し、雅正な語彙を厳選して書かれた文章と評価できよう。これに負累の屈辱を受けた屈原、司馬遷、賈誼を強く意識する点や、升庵の身上に余りにも精通する点を加味するならば、恵淑・升庵・独嘯庵（徂徠派）の三者同一人説という大胆な仮説の提起も許されるのではないかと思う。

さらに独嘯庵の有する名字（名「鳳」、字「朝陽」、通称「昌安」「鳳助」）からの分析を進めると、「鳳、朝陽に鳴く」（『詩経』大雅，卷阿／天下太平の瑞兆）は有名であるが、「昌安」（『説苑』、『焦氏易林』／太平の意）についても「鳳」との縁語的關係が指摘できる。また「長府赤間関安岡辺聞会書」（毛利家文庫・末家17）には「長富保助／医者長富友庵養子。後松庵と云」と見え、確かに「保（鳳）助」と「松（升）庵」が同一人物であったことが裏付けられ、「昌安」（治平）→「升庵」（雄飛・榮達）→「嘯庵」（慷慨か）の心性三変説をもって「天柱居記」との整合性が得られる。そして何よりも重要なのは「天柱山」の名称であり、六朝・唐宋の地理書（『括地志』、『太平御覧』引『凶経』、『太平寰宇記』等）に照らせば、「天柱山」は鳳凰降臨の地・岐山（『国語』周語上）の別名と判明する。つまり「鳳」は「天柱山」に身を寄せて当然なのである。ゆえに赤間関の天柱山（現下関市役所北西の小岡と推定）に仮寓した長富升庵なる「非常な人物」（伊藤評）は、永富鳳（独嘯庵）のことだと断言できるのである。山名も「鳳」によって命名された可能性が高い。

従来の独嘯庵伝で「天柱居記」を取り上げたものは皆無である。しかし明白に一代の医傑・永富独嘯庵の糖禍前後の状況を詳述した一文と結論でき、資料的価値は「自撰行述」、「独嘯菴先生行状」に次ぐ位置を占めるであろう。今後の独嘯庵研究に際しては参照が必須になると判断される。